

ネ

ツ

ト

リ

拷

檻

成人向

ハルユキ

「J・J」は

この格好って
ネットなのか？

違いますよ「J」は
リアルです

その愛らしい
蝶の衣装を用意
したんです

病院で寝ていた
あなたをわざわざ
ここまで運んで





意識のなかった
私になら
弱小のキミでも
勝てたろうに

なるほどキミが
シアン・パイルか

どうい
つもりかな
これは？

まあ今の私からでは
得られるポイントも
わずかだがね

ポイント？

とんだ誤解だ
そんなモノだけの
ためにボクがこんな
手間をかけたとでも？

みんなから
狙われる
最強で最悪の
賞金首

その弱点を掴んだ

ボクだけが
ブラック・ロータスの
正体をリアルを
知っている

フミ

フミ



この好機は
最大限利用
しなきゃね

ボクがちよいっと
メールでみんなに
報せたら
あなたはお終いだ

な
キミはドコを
触っている!

離れろ!

黒の王も
所詮リアルでは
クールぶつた
ただの小娘



下手したら
殺されるかも
しれませんよ

リアル割れ
したら

マンコを弄られれば
泣いて喚く
弱いガキだ

拉致られ
煽られる

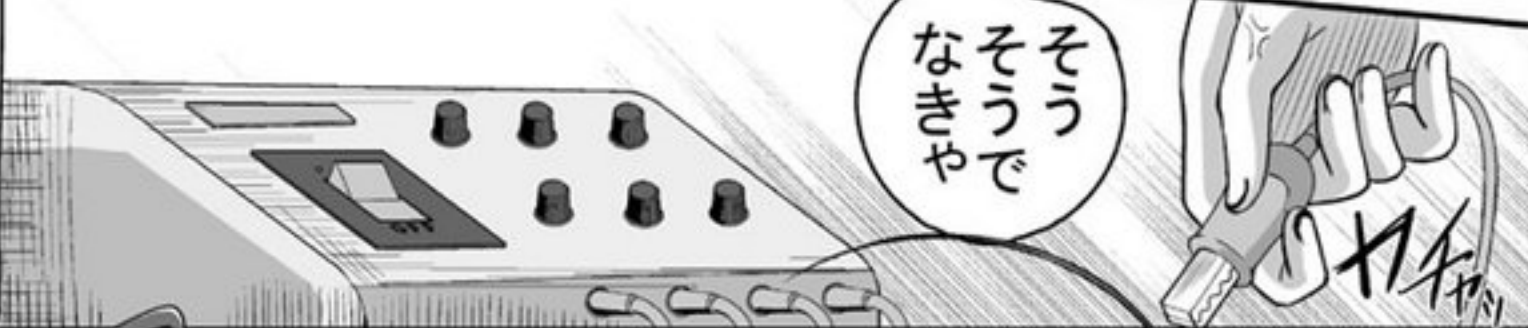


あまり私を
舐めないで
欲しいない



あなたはボクに
逆らえない
雌奴隷なんですよ

少しは抵抗して
貰わないと
盛り上がり
でずよね

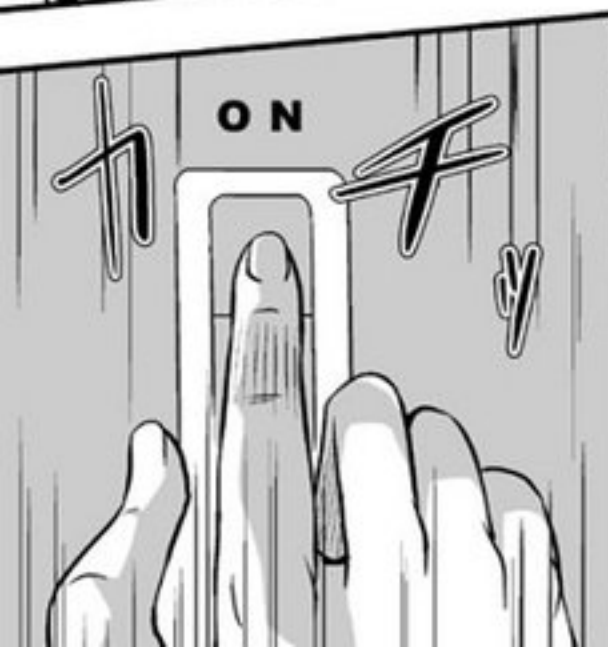


そう
そう
なきや



簡単に
音を上げない
下さいよ

うっ
キサマ





あぐ
こころんなはひい
とつめ

いぎやああああ

ヤッヤ
ヤッヤ
ヤッヤ

ドゥ

ドゥ

ドゥ

ドゥ



ダメだ!!
耐える!!
耐えるんだ!!

こんな奴に
屈服するな

はあ
はあ



流石は
黒の王だ

でも
ここまで
やられたら

どうなっちゃ
うんでしょ??

ギョ

ウーン



まだクリを挟んだ
だけでそんな反応
とは電撃を流したら
どうなっちゃうのか
楽しみですよ

やめろおお
ダメ！ダメ！
やめてええええ！

頼み方が
違いますよ
雌奴隷さん



ヒヤハハハあの
ブラック・ロータス
がお漏らし

あんなに
強がつてたのに
こんなあつさり
漏らすなんて
バカ過ぎる

タイヨオオオオ

ムリもうダメ
こんな痛いの
耐えられないの

え？
なんです？

もう
と・とめて

と・ひよめ
れんきおねら
いらから

なんですか
よく聞こえ
ませんよ

ひゃひい

マンひよに
チンポれも
何でも入れれば
いいでしょ!

犯していい
ひやられんきもう
ひよめへえ

まだ口の
きき方が
なつて
ませんが

初回サービス
で良しと
しましょう

もし
逆らえれば

戒めが解けた
からつて
へんな気を
起こさないで下さい

今度は
止めま
せんよ

ひい



ようやく
立って
きましたよ



ほら自分で
おっ立てた
おチンポを
じっくり見て
下さい

見ろと言っ
てるんです

いやあ



聞き分けが悪いと
今度はその
ケツ穴に
高圧電流ですよ



黒の女王が
ボクに跪いて
チンポに
キスするなんて



さあ次は
そうそう
いい子です



かわいいお口で
啜えて下さいよ
女王様!

じつに
いい気分だ

ほら

さああ
初ザーメンだ
しっかりと
飲みほせよ!



うぶうう

おははは

おははは



ホントに
モノ覚えの悪い
奴隷だ

おい！まだ
余ってるじゃ
ないか
勝手に口から
放すなよ



じゃあそろそろ
下の口も楽しませて
もらおうかな

ないや？
なんだボクに
逆らうの
か？

いいぜイヤなら
すぐにやめて
やるよ

ただし
罰は受けて
貰うがな

電撃は
もういや

い...いや



ならわかるだろ？

うっ

わ・私の処女
マンコに・
チンポを突っ込んで
下さい

はっはっはっは
そうだよ
最初からそうやって
従順にしている

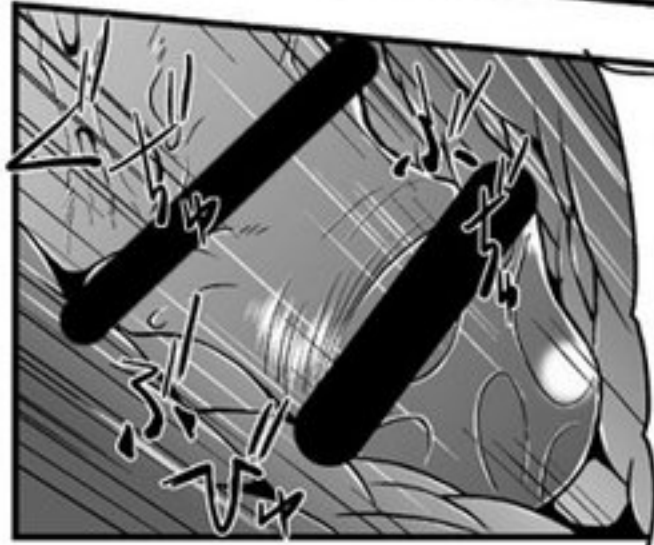
フ



この雌ブタがあああ
どうだ感じるか？
感じてるんだろ？

イキガキ

ヤッ



ほら
今どうなってるのかちゃんと
自分でも
言ってみろ



言うな
そんなこと
言うな



えん



雌ブタの処女マンコが
ギュウギュウボクの
チンポを締め付けて
きてるぞ



イヤだああ
こんな奴にキス
されて私感じてる

キモチ良く
なつてきてる

うぶうぶうぶ



快感が止ま
らないだろ

ほら！
タクト様の
おちんぽ
良かったですって
お礼はどうした？

なんだよ
言えない
のか？なら
お仕置き
かな

や・やめ
ちやんと
言うから

電撃はいやああ



遅いんだよ
聞かれたらすぐに
答えろ！

イギヤアアアアア

タクム様のオヒンポが
雌フタの中に入っ
れえ
キモチイイれす





いやだああ
私はハルユキが

ボクの雌奴隷として
生まれ変わるんだ

さあ教えてあげるよ
脳が焼ききれるほどの
快感つてやつを
そして



流れてくる私の中
にタクム様の愛情
がとみゃらない
きもひいいいよおお

あんなブタのことは
忘れさせてやるよ

キョボッ

くだしやい
オマンコ
さびしいんれしゅ

だ、誰だ
こんな
品の無い
ことを

チンポもって
お願いだから
チンポ入れて



な！
わ・私が
言ってるのか！

タクト様あ

なんで！どうして！
私の体が
口が勝手に喋る

オひんぽ
くだしやい

じゃあ
特別に
チンポを
やろう

いい子だ

おほおおお
キモヒイイイ

ありがろう
ございませゅ

雌フタに
お慈悲を

やめろおお



いいれしゅうたく様の
愛のザーメンが
雌のタマンコに
流れ込んできましゅううう

オチンポが
私の中で
はねてくるうう

お恵み
ありがとうございます
ごじやいましゅううう

だめだ
ごんどの
頭がおかし
なりゆうう

本当に自分が
オチンポ
欲しがってる
みたいにな
つちやうう





彼女には淫夢の中
でも淫夢を
見てもらう

起きるまで
夢は終わら
ないよ

そして
起きる頃には
ボクの従順な
雌奴隷だ



まだまだ続く！
地獄のネットトリ洗脳

すでにブラック・ロータスの体は堕ちた。だが、強靱なその心は屈指ない。ネットの世界でならこれで、いくらでも奴隷にできる。しかし、現実に戻れば……。だからまだだ。彼女の心もボクのモノにしなきゃいけないんだ。催眠状態を解きチンポに小突き回され、それ自ら求める夢を見続け憔悴しきつた黒の王をボクは見る。その目は濁り、生気が無いように見える。だが違う！その奥底には隙あらばボクを食い殺そうとする。炎が宿っている。油断は出来ない。「も：もういいでしょ、許して」許す？何をわけのわからないこと言っている。

「まだお前は心底ボクに屈服していないじゃないか！まだボクに敬愛の眼差しをむけていないじゃないか！」

「許して欲しいですか？」

「はひい許して下しやい！」

涙と涎で汚れた面で

哀願する黒の王。

それは芝居なのか？

本心なのか？試してやろう。

「なら、

『私はタクム様に

一生涯御使いする

精液肉便器の雌奴隷

でございます」って言うてくれ」

「……一瞬の沈黙。

テストは終わった。

この雌はボクに忠誠していない。

「どうしたんだ？」

「わ：わかりました」

渋々といった様子で

言葉を復唱する雌。

「よしならそれを3分以内に100回、噛まないようにね失敗したらキツイお仕置きだ。はじめ！」

「そ：そんなのムリよ、

そんなのって」

「はい(笑)失敗だ」

「う：ウソよ私にも」

「挑戦中は

忠誠の言葉以外は

発しちやだめだよ」

雌に洗脳装置を被せる。

「いやああああああ」

「いくらいやがってもダメだよ」

「さあ、次は自分で好きな

お仕置きを選ぶといい」

雌の前にボクは

お仕置きメニューの

ウインドウを開く

それを見たメスは絶句する。

・笑い発狂

・射精地獄

・丸呑み

・産卵陵辱

「どうした選べないなら

ランダムになるが」

「ゆ：許して」

「お仕置きを耐えたら、

また忠誠の言葉を

言うチャンスをやるから」

笑い発狂

涙をしたたらせ
嗚咽しながら雌が選んだのは
笑い。

触手によって固定された手足、
身動きできない雌の脇や足裏を
容赦なく触手たちが撫でる！
「ひひひひひひやめへえええ息がれきない」
涙を浮かべて雌が、
笑い続け様はじつに滑稽だ。
「いひひひいひひいあぎやあああああ」
既に開始から3時間だ。
普通なら発狂してもおかしくないが、
雌はまだ耐えている。
流石は黒の王か。
「おほほほいいひいいお」



足裏にはびっしりと
しきつめられた触手の床。
その一本、一本が、敏感な
足裏を丹念に舐めましてゆく。

その体感には想像するだけ
でも怖気が走るものだ。

5時間：6時間：7時間

……10時間



「ひいいいはひいじぶもうひやめへええ」
「ふううあひいいい(笑)ひいびうう」
もう雌は何を言っているの
かもよくわからないが、
体液でグジョグジョになったアヘツラで
笑い続けている。こっちまで笑えてくる。

「苦勞だったね」

主人を無視する奴隷。まだお仕置きが足りないのか？

「おい、返事はどうしたんだ」

「はい、はい、ありがちようございませす」

か細い声でようやく返事する。やはり舐めきられている。

「じゃあ、忠誠の言葉だ。始め」

「お願いれしゅからもう、もう許して下さいタクム様」

「もうしゅからいませんから！」

「奴隷でもなんでもなりましたひゅから」

「そんな言葉じゃないよ」

「じゃあもう一回お仕置きだ」

「ひい、いやあもういや、なんれしゅ！」

二度目のお仕置き
奴隷が選んだのは射精地獄だ。

選んだ瞬間。奴隷の股間に

チンポが生える。それはここがネット！

バトチヤルだからこそありえること！

当然玉も付けてやった。

これで何千回でも射精の

快楽を味わうことができる！

「なに、なんで私のアソコにオチンチンが」

何本ものブラシ触手たちにチンゴを

シゴカレまくる奴隷。

「やあ、これダメ！止めていやあ」

一度目の射精をあっさりとしてしまう。

一度してしまえばもう止まらない。

連続百回射精もあつという間だろう
「おひい！なんなのこれ、頭壊れちゃうう。
なんで私女の子なのに男の子みたいにおチンポ生やしてザーメンをぶりぶりひりだしやなきやいけないのおお」

「また射精しちゃう。
オチンポ！ビクン！ビクン！
でつちやうらうらう！」

暴れる奴隷の手足に触手が巻き付き
体をあらぬ形に固定され
雌ブタはひたすらに強制射精をさせられる。
「いひい！オチンポきもひいひいの
とみやらにやいよおお」
サオただけでなく玉までももみじだかれ
とめどなくまたザーメンが



「さあ忠誠の言葉を言えるチャンスだ
「はひい」

ウツロな瞳で応える奴隷。

ようやくボクの偉大さがわかってきたらしい。

そしてボソボソと言葉を復唱し始める。

順調に思えたそれもたつたの

4回目で嚙んでしまう。

「なんだもう嚙んでしまったのか？」

「ひいひいもういれしよ、

ちやんと言うから！言うから！」

「ダメだよ。しつかりとやりきらなきゃ
次のステージにはいけない」

そして奴隷には
丸呑みのお仕置きを
食らわす。

「いやああ飲まれる
こんなのいやああ」
巨大な化け物の触手に
飲み込まれる奴隷。





びゅっ

その中で全身をくまなく
愛撫され続ける。
そうならばいきつくのは
「こっこんなのっておかひいよ」
「いひいひいひいひいひいひい」

手の指を舐めまわ
されるだけで絶頂！
耳の穴を穿られて絶頂！
脇を撫でられて絶頂！
とまることのない永遠絶頂！
永獄のアクメ晒し！

「いぎゃああああああああ」

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

「さああ三度目の挑戦だ」
 「ひいひい、ふうふう」
 「ひいかな」
 「はひい」
 奴隷はゆつくりと噛まないように
 忠誠の言葉を復唱し始める。
 しかし、89回目で無情にも
 「時間切れだ。残念だったね」
 「そ、そんなにや、そんなにやのって」

そして奴隷の四度目の
 お仕置き『産卵』が始まる。

化け物のマユに捕えられた雌。
 体を肉壁に埋め込まれ指一本自分の意思では動かさせない。
 身体を敏感にさせる興奮ガスが吹き出る
 マスクを口にあてられ、強制的にガスを吸わされる雌ブタ。

すでにガスが体中に回り力が
 入らずぐったりとしている。
 マスコには常にぶつどい触手が
 捻じ込まれ、機械的にピストン運動を
 繰り返す。腹に卵とザーメンを
 送り込み続ける。
 「あうっひううはひい」
 数時間この状態が続き、
 意識はもうろうとしていくらしく
 口からでる喘ぎ声も断片的だ。

「出りゆう卵でちやうふう」
 小さな穴を押し広げ、
 裂いて、無理矢理に卵が
 まだ排出される。

「これでもう何個の卵を産んだのか。
もうひいひいやああ産卵ひいひいやああ」

腹がすつきりすれば出ない母乳を
搾乳しようと触手が
小さな胸と乳首を弄り回す。

そしてまた膣に当てられた
触手からは大量の卵が膣内へと
ザーメンとともに流され
腹の中で育った卵が排出される
終わりの無い産卵サイクル。

「えひひい卵まぢや産んじやう」
「産卵きもひひいよ」
もつろ卵欲しいのおおお

すでに何十個と生んだ卵が
雌ブタの下に転がり
卵から帰ったおぞましい
化け物にも雌ブタは騙られている。
「アヘアヘアへへ赤ちゃんもつろ
もつろお腹いじってマシヨ!
付き回して、きもひひいいの
もつろもつろちようらいい」

彼女の精神は堕落した。
これでリアルに戻っても
ボクに逆らうことはないだろ。



病室

雌ブタ奴隷が目覚めた。
彼女が最初に
見つめたのはボク。

ボクの隣で困惑している親友。
「あ、あれセンパイとタクツて
知り合いだったの」

「ああ、黙っててゴメンな、
古い付き合いなんだ」
顔を塞ぎ演技するボク。
バカな親友はあっさり
と騙される。

「彼女昔からボクのことを
好きらしくてさ」
親友の困惑はさらに
深まりそれを必死に
隠そうとしている。

「でもボクにはチユがいたから
ずっと断っていたんだ
そしたらハルのことをどこか
で知ったらしくてさへんな
ちよっかい出してらって、
チユから聞いたぜ」
親友の顔が絶望に沈む。
「どうなんだ黒雪姫」

ボクはぼんやりとしている
雌奴隷の方に顔を向ける。
彼女は目に涙を浮かべて。
「はひいごめんなさしやい
タクム様に見てもらいたくって
必死だったんでしゅ」
とボクに熱い眼差しを
向ける雌ブタ奴隷。
「ごめんね！ハル君
純色の六王とか私が
黒の王とか全部嘘なの」
「全てはタクム様の視線を
この卑しい私に少しでも向ける
ためだったのごめんねハル君」
「いいんですよ……は……はははは」
乾いた笑い。
涙を必死に堪える愚かな親友。
噴出しそうになるのをボクは
必死に抑えるのが大変だった。



ハル、ゴメンなだけでさ
卑屈なデブが
モテルわけないんだよ。
努力する前向きで
無難な男こそがモテル
それこそが
リアルつてもんだろ。

ボクは泣きじゃくる
雌ブタ奴隷の手を取って
病室を後にした。



洗脳完了





黒い毛ノ